

# 「M26照明弾・M105伝単爆弾 報告3」

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷 和生

## 1 入手の経緯等

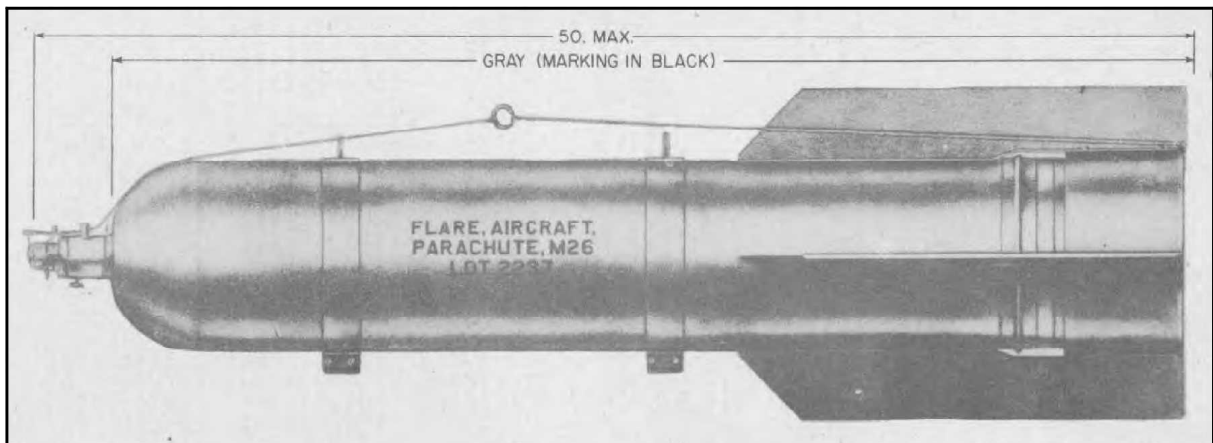
- 本資料は2023年7月ネットオークションで入手したもので、出展元は岐阜県。出品者説明によれば「(愛知県)一宮空襲時の100ポンド焼夷弾」と解説されていた。
- ここで示された「一宮空襲」について、一宮市HPより抜粋する。「一宮市が本格的な空襲を受けたのは、昭和20年7月のことでした。同月12日深夜から翌日未明にかけて侵入したB29約20機の編隊が、市内北部の葉栗・西成両地区と今伊勢町に油脂焼夷弾を投下しました。さらに同月28日午後10時頃には、マリアナ基地を飛び立ったB29約260機が本市上空に侵入し、油脂焼夷弾の波状攻撃を集中したのです」
- 一宮市立博物館学芸担当神田氏によると「一宮地名記載の“空襲予告伝単”は所蔵しているが、投下状況等は不明」、「照明弾・伝単投下器の証言は確認されていない」との事である。
- 但し、市民団体「一宮空襲を語り継ぐ会」森靖雄氏による著書『戦時下の一宮 くらしと空襲』では、以下の様な記述が見られる。
- 作戦任務第264号・1945年7月12・13日「目標：一宮市街、出撃機数：第1目標130機、・臨機目標2機(第73航空団)、爆弾の型と信管：AN-M47A2・100ポンド焼夷弾瞬発信管」、「第1目標に772ト」、「7月13日 0時45分～2時45分」、「10機の搭乗員が目標を視認、他のB29は視認できず」。ここでは照明弾の記載は見られない。
- 作戦任務第299号・1945年7月28・29日・第73航空団「目標：一宮市街、出撃機数：第1目標122機、・臨機目標2機、爆弾の型と信管：E46 500ポンド集束焼夷弾(M69)」、「第1目標に868.8ト」、「7月28日 22時56分～2時45分」、「26機は目視での投弾、96機はレーダーでの投弾」とされている。この日の天候は、「米軍記録によると晴天であったが途中から雲が出て、終わりのころは半分ほど雲に覆われたようである」と記される。ここでも照明弾の記載はない。
- 写真9の一宮銘記載の「伝単」については、「7月28日空襲の3日前に」散布され、空襲予告がなされた。ただし、伝単投下器についての証言は記載されていない。



写真1 入手した「M26照明弾」

## 2 M26照明弾

- 一般的に照明弾とは「銃・砲・飛行機・船舶・車両などから夜間に発光する物体を空中に放ち、周囲を照らし視界を確保したり、味方に合図を行うために使用するもの」である。材質的には、「アルミニウム粉、硝酸バリウム、硫黄をワセリン、パラフィンなどで練り合わせた物が使用されていた」とされる。
- 日本本土空襲において、航空機投下の照明弾は、M26照明弾の様に空中でパラシュートが開き降下しながら照射するものと、M46照明弾に見られる様に、弾体そのものが燃焼するもの二種が知られている。



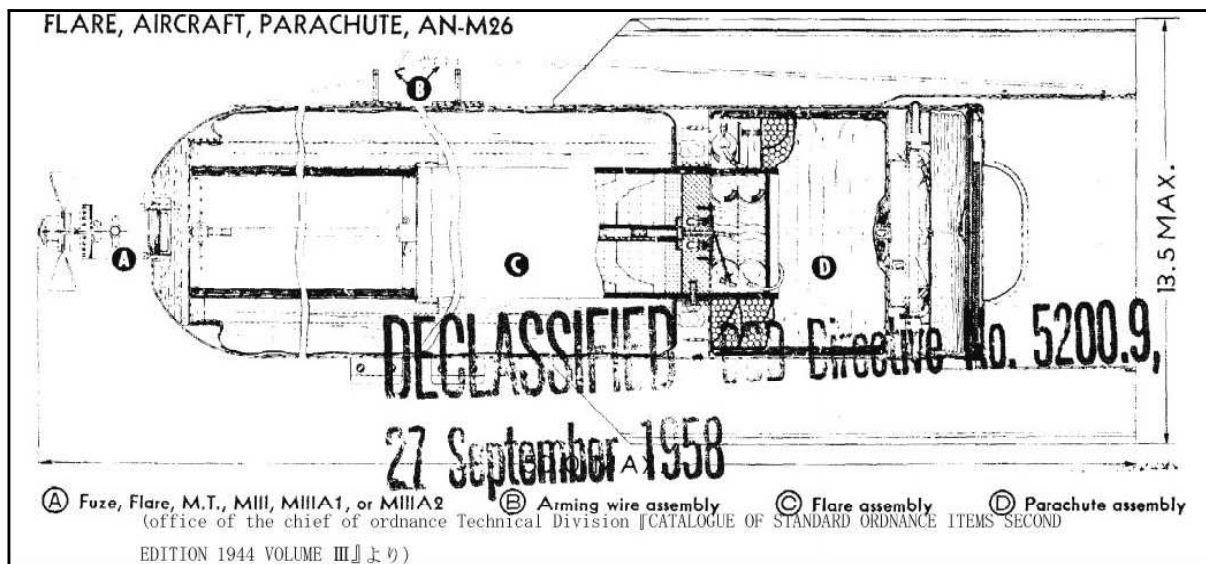


図1 AN-M26照明弾 外観図  
 図2 AN-M26照明弾 内部構造図  
 写真2 昭和20年4月2日、東京西南部工業爆撃で投下されたM26照明弾の弾殻  
 写真3 地上に落下した同資料と想定される「焼夷弾を調べる憲兵たち」  
 ※本資料は、たまや・令和元年発行『この弾薬箱のさらにはいくつもの片隅に』からの引用

- これら航空機による照明弾投下は、夜間での目標対象物への照準や写真撮影のための照明、地上からの対空防御を盲目とするための照射にも使用されていた。
- M26照明弾は、丸みを帯びた弾頭と、4枚の尾翅付きの金属製弾尾蓋を取り付けた円筒形の弾体から成る。弾頭には時計式時限信管 (M111, M111A1またはM111A2) が装着され、弾尾は取っ手が付けられた輸送用カバーで閉じられる。また、吊り下げ用にサスペンションラグ2本が14インチ(約36センチ)の間隔で装備される。
- 内部には、パラシュート付きの照明装置が収められる。

### 3 本資料の規格・特徴等

- 本照明弾は全長119.0cm、頭部ノーズ径20.0cm、胴部から尾部にかけては楕円状に変形し尾部径18~27cm、信管挿入部径40mm、尾部の四翅とも尾翅長47.0cm、尾翅高7.0cm、吊り下げ用サスペンションラグ2本間は36.0cm、残存重量7.2kgを測る。
- 経年による劣化で、全体に錆が浮き出るが、尾部外面の一部には、当時の灰色塗装が残存し、特に弾殻内部の全面にはOD(オリーブドラブ)色が良好に残存している。



写真4：左 M26 照明弾全景  
胴部中央の横書き三段で「FLARE,  
AIRCRAFT, PARACHUTE,  
M26 LOT ○○○○」銘  
最下段に「Komiya」銘  
写真5：右上 頭部の拡大状況、信管部  
の開口状況  
写真6：右下 尾翅部の拡大状況、外面  
色の灰色と錆びの状況

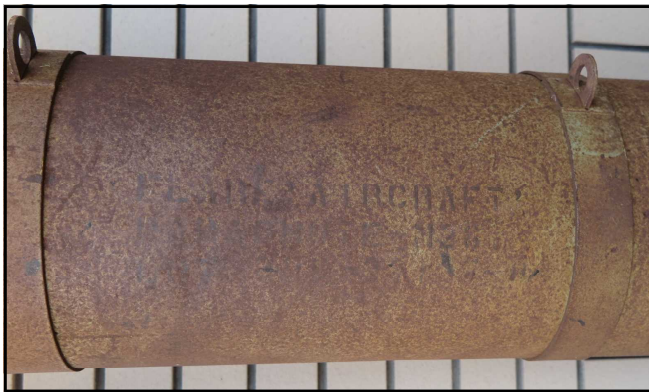


写真7 胴体中央部のマーキング  
写真8 下段黒字「KomiYama」銘

□また、弾体外観中央部には横書き三段で「上段 FLARE, AIRCRAFT, 中段 PARACHUTE, M26 下段 LOTOOOO」が、ステンシルフォント・黒字で描かれている。また、弾体最下段には横方向横書きの手書きでサインフォント・黒字で「KomiYama (想定)」と描かれる。これは人名「小宮山・小見山」もしくは地名「古見(山)町」とも想定される。

#### 4 まとめ

- 本資料は、当初で示された「100ポンド焼夷弾」ではなく、形態及び記銘等から「M26照明弾」外殻であることが判明した。
- 工藤洋三氏からのご指摘によれば、M26照明弾は「1945年3月25・30日は名古屋、4月2日は中島飛行機武蔵製作所、4日は静岡の三菱、中島飛行機（小泉）、立川」で試験的に使用されたとされる。
- 先述した様に、2回（7月12日深夜・28日深夜）にわたる一宮空襲時での照明弾証言は得られていない。部隊戦闘記録による、確認の手立てを検討中である。
- さらに、M26照明弾には、外郭・弾殻を使用したものとして、図3に示す「伝単投下器」が知られている。以下、概要及び図等を記す。
- 米軍がアジア太平洋戦争中に利用した「ビラ爆弾・ビラ投下器」は、100ポンドT1ビラ爆弾、100ポンドT2ビラ爆弾、500ポンドT3ビラ爆弾の三種である。
- T1はM26照明弾を、T2はM15アダプター・クラスター弾を、T3はM16アダプター・クラスター弾をそれぞれ改造して作られた。
- 本M26照明弾弾殻を使用したT1は、落下させる照明弾を収容していたスペースに、ロール状に丸め込まれた宣伝ビラ「15,000枚」が詰め込まれた。写真10参照。信管が目標地点の上空3,000mで作動するように設定されていた。
- 爆弾への伝単の「はめ込み」方は、単純なものである。金属かボール紙の円形型板に詰め込み、出来上がったビラのロールを崩れないように、型板から取り出し、写真10の様に、弾殻に収納する手立てである。

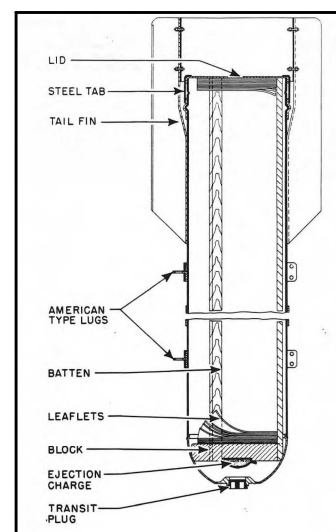
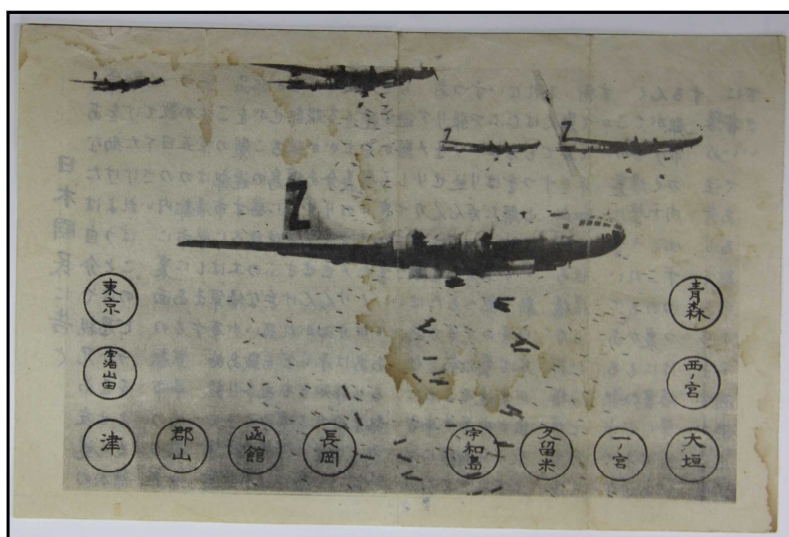


図3 M26外郭・弾殻使用の伝単投下器内部構造図「British Bomb, leaflet, No.2 MK1」より  
写真9 一宮銘記載の投下「伝単」



写真10 2名の海兵が、M26弾殻利用の「T-1・M105 100ポンド伝単爆弾」にリーフレットの束を詰めている様子

写真11 兵器係米兵による「T-1・M105 100ポンド伝単爆弾」点検調整の様子

写真12 「T-1・M105 100ポンド伝単爆弾」を抱えてB29まで運搬の様子

『八王子空襲の記録』より

- 一宮市は、末期には写真9の「空襲予告伝単・第2回投下資料」内に在地記録されたこともあり、証言・現物資料残存等からも伝単投下がなされている。但し、地元証言等では、伝単投下器（M26弾殻使用の伝単投下器・M105 100ポンド伝単爆弾）についての証言は、確認できていない。
- 現在、全国に残された「M26照明弾」及び「同弾殻使用の伝単投下器」の実物資料の所在等を調査中である。ただ、原時点では現物確認には至っていない。
- 本資料の重要性・貴重性に鑑み、全国の自治体・市民グループ等の展示会等への貸出等を準備している。おって本会HPより貸出規約等は紹介する。
- 本緒言報告については、工藤洋三氏・山本達也氏からの資料提供並びにご教示等をいただきました。記して感謝申し上げます。



連絡先

□くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷 和生

Eメール takayanagi912@yahoo.co.jp

HP URL https://www.kumamoto-senseki.net/